

機織りで喜び見つけた

【土佐】ギッコン、バツタン——。10畳ほどの手狭な作業場から心地よい機織りの音が聞こえてくる。土佐市新居の知的障害者施設、光の村の入所者約50人が、10月5日から吾川郡いの町鹿敷の土佐和紙芸村「くらうど」で織物の作品展を初めて開く。「自分たちにもやれる」。入所者らは真剣な表情で糸を紡いでいる。

(難波亮太)

土佐市の障害者施設「光の村」来月初の織物展

作品展は光の村にある手織り工房「樂布(がくふ)」で作業する入所者約50人と、賛同する県内のビーズ作家らが出品。「手をつなごう手づくり作品展」と銘打って10月14日まで開く。

月1回来高し、樂布で機織りを指導する戸室かず子さん(62)と「さいたま市」が3年前、地元で娘の佳子さん(35)と一緒に織物の親子展を開いたことが、作品展のきっかけとなった。

佳子さんは自閉症で12歳の時に光の村に入所。一定のリズムで行える機織りは佳子さんにぴったりで、約7年前から親子でベストやカバンなどの作品を仕上げてきた。

初めて親子展を開いて以降、「光の村でも機織りを」と、来高時に入所者に披露すると、興味津々。敷地内にあった小屋を作業小

「自分たちもできる」伝える

屋として、指導するように3糸を織るのに数日かかった。戸室さんによると、当初では1週間で5枚も織れるは「機織り機の前でじっとよくなるほど技術もアツ座っていらなかったり、プした。



「自主的に(機織り機の前に)座ってできるようになったし、目の前で物ができあがっていくのが楽しいんでしょね。織る音も音楽みたいですし、みんな少しずつ成長している」と戸室さん。「親子展のように、入所者が織った作品だけの展示会を地元の高知でやりたい」と思うようになり、7月に関係者で話し合い、準備を進めてきた。

戸室さんは「能力を生かせばできることはたくさんある。織物にかかわるようになってみんな喜びを見つけた。それが作品に出ていらず。これだけできるんだということも見てもらいたい」と話している。

本番に向けての作品づくりも佳境。戸室さんが横にそっと立ってその作業を見守っている。黙々と機を織る入所者。ギッコン、バツタン、ギッコン、バツタン——。今日も小さな作業小屋から軽快なリズムが響いている。

▲作業をする入所者を見守る戸室かず子さん(右)(土佐市新居の光の村)